

溝上慎一 (2018) 大学生白書 2018―いまの大学教育では学生を変えられない― 東信堂
 溝上慎一 (責任編集) 京都大学高等教育研究開発推進センター・河合塾 (編) (2019) 高大接続の本質―「学校と社会をつなぐ調査」から見えてきた課題― 学事出版
 森朋子・溝上慎一 (編) (2017) アクティブラーニング型授業としての反転授業「理論編」ナカニシヤ出版
 森朋子・溝上慎一 (編) (2014) アクティブラーニング型授業としての反転授業「実践編」ナカニシヤ出版
 若林明雄 (2009) パーソナリティとは何か―その概念と理論― 培風館

あとがき

私は今49歳になろうとしている。人生100年時代から見れば、ちょうど人生のレースを真ん中で折り返そうとしているところである。

本書は京都大学教授として、「大学教員」として、最後の執筆になるものである。

京都大学の教授はこの夏でもう辞める。「大学教員」としては、残念ながらここで引退である。二年前から準備してきたことである。

これからも「研究者」としては仕事を続けたいと思っている。

研究はどこにいても、一人でも、最低の条件さえ整っていればすることができる。私の教育の仕事には京都大学の名前が一役買ったに違いないが、研究に京都大学の名前はほとんど関係がない。とくに国際的な仕事はそうである。Kyoto Universityを知る外国の研究者はそう多くないのが実情である。

最後なので、少し個人的な事情を書かせてほしい。こういう場でないと、なかなか伝える機会がない。

振り返れば、京都大学には助手から教えて二二年いたことになる。

学生時代は神戸大学と大阪大学で過ごしたが、職に就いて以降はずっと京都大学で過ごしてきた。大阪大学には大学院の二年しかいなかったのですが、私の学生時代はたかだか六年にすぎない。京都大学では、それよりもはるかに長い期間を過ごしてきたことになる。

大学院を終えた後、学生の延長のような気分で長く京都大学に在籍できたことは、とても恵まれたことであり、幸せなことだったと思う。

京都大学で学生として学ぶ人たちが、この環境に少しでも長くいて研究者として力をもっとつけたい、研鑽を積みたいと思うような状況がある。しかし、いつかは他大学の教員になって京都大学を離れなければならない。京都大学での恵まれた研究環境から離れることは、子の親離れと同じで、皆が辿る自立のプロセスである。しかし、多くの学生にとって一種の恐怖である。

そのような中、私は大学院の修士課程しか終えていない若い20代半ばに、早々と助手で、しかも京都大学の外から着任した。公募制が一般化した昨今では、(今日の)助教が外部から採用されることはまったく珍しいことではなくなっているが、当時はかなり異例のことであったと聞いている。「はじめに」で紹介した恩師・梶田叡一先生が引つ張ってくれたのである。

これはけっこうもめたと、梶田先生から後で聞かされた。京都大学には当時30歳を越える職なしのオーバードクターが多数いて、一人でも大学の職を見つけてあげたいと思う状況があった。助手のポストは、そうした人たちのまず身近な就職先であった。それを外から、しかも20代半ばの若造を採用するなど、当時はなかなか考えにくいことであった。

梶田先生は少しして、京都ノートルダム女子大学へ学長として出られたが、田中毎実教授をはじめ、センター(当時は「高等教育教授システム開発センター」。現在は改組されて「高等教育研究開発推進センター」)の先生たちは私をとてかわいがってくれた。

田中教授は、29歳の時に私を助教授に上げてくれようとした。しかし、助教授に私は若すぎる、慣例とも合わない、教育学部の教授陣とこれまたもめた。結局、妥協案として、「専任講師」という教育学部・研究科始まって以来のポストを新たに作り、内規も変え、私は30歳で専任講師となった。もともとポストは助教授のものであったので、33歳で助教授となった。

私は京都大学への着任時、梶田先生から「助手から上に昇進することはないから、外の大学に出て行く準備をしておきなさい」と言われていた。長く京都大学にいないことは、着任時の前提であった。私もそんなものだと思っていた。しかし、結果的には二〇年以上もいることとなった。

京都大学には、当然のことながら、研究の世界でトップクラスの先生たちがたくさんいる。私はまだ20代か30代の若造であったが、同じ教員、同僚というだけで、彼らと教授会、全学会議、プロジェ

クト、イベント、酒の席でご一緒し、たくさんの議論をした。彼らは、私の拙い考えや研究に真摯に耳を傾け、日常的にコメントや助言をくれた。「はじめに」で紹介した安彦忠彦先生とも、彼が京都大学の講演会に呼ばれた中で知り合った。あまりにも恵まれた環境だったと思う。

良いことばかりではなかった。彼らのすさまじい研究活動や業績を間近で常時見せつけられ、誰々が〇〇賞を受賞したなどという話は毎月のように耳に入ってきた。自分の小さな世界に自己嫌悪したことは、数え切れないほどであった。

こうして育ってきた私が、今自分にできていない多くの問題を認識しながらも、他方で、昔のようにはあまり自己嫌悪しなくなっている。44歳で教授にもなって、上がってしまったかのような気分にもなっている。これは相当「ヤバイ」心境である。

いつしか私は、もともとの心理学者としての基本に立ち戻りたいと考えるようになっていた。そして、新しい課題に取り組み、これまでの大学教育改革や高大接続・トランジション改革といった仕事もふまえて、研究や実践を再構成したい。変わる社会に関わって、できる限りの社会貢献をしていきたい。残りの人生はそうにして過ごしていきたい、そのような形で人生を再出発させたいと考えるようになっていたのである。

再出発するにあたっての新規課題はたくさんある。

「学校教育」と「人の発達」を理論的に統合する研究が、まず最初に取り組みたいことである。

戦後、社会の近代化の成熟期にいったん合流したこの二つのテーマが、この半世紀独立して発展を遂げてきた。この二つを再び合流させる必要がある。これは、心理学と教育学の二足のわらじを履き続けた私だからこそできる仕事だと思っている。そして、変わる社会に呼応して、今私たちが学校で何を变えようとしているのかをメタ的に理解する、実践的にも重要な作業になると思っている。これに、後で述べる、地域連携・地域創成、人生100年時代を課題に加える。

しかし、大きな問題があった。

私の今いる高等教育研究開発推進センターで、この再出発はおおよそ許されないだろう、ということであった。

端的にいえば、センターに所属しながら、私のこうした課題に取り組むには、許容される枠をはみ出しすぎているからであった。

大学の研究者なのだから、好きなことを研究していい。それは権利である。

それはそうなのだが、私の所属するのは高等教育研究開発推進センターであって、そこには、高等教育に関する研究・実践をおこなっていくという組織的ミッションがある。わかりやすくとえれば、私はその研究員なのである。その研究員が、高等学校までは高大接続のお題のもと許され

るにしても、小学校、中学校まで拡げて、毎週学校へ指導に行くのは明らかに組織的な許容範囲を越えていた。しかも私の関心は、学校教育全体へ、人の発達全体へ、地域課題へと大きく拡がっていた。ここまで研究してきたのである。ここまで全国的に実践に関わり、指導もしてきたのである。そう簡単に止まらない。しかも、これに、私の妙に上がってしまった感のある「ヤバイ」心境が覆いかぶさる。総じて、どん詰まりである。

たしかに、京都大学教授という肩書きは魅力的である。しかし、京都大学の定年は65歳。あと一五年もこのような状況で京都大学で過ごすのは、どのように考えても無理があった。慣れ親しんだ京都と住んでいる地域を離れることは心残りなのだが、私に与えられる選択肢はそう多くなかった。

この秋から異動する、横浜市にある学校法人桐蔭学園からの話があったのは、こういう時であった。私は研究者として生きていく人生を選んだ。残りの人生は、研究者として、社会のため、社会に役立つ仕事をしていこうと決心したのである。

桐蔭学園では、二〇一五年より教育顧問として教育改革をお手伝いしてきた。アクティブラーニング型授業やキャリア教育、探究的な学習、高校版IRなどのテーマで指導をしてきた。

指導の対象は主に中学校・高等学校・中等教育学校であったが、その手前の幼稚園部・小学部も併せて指導してきた。とくに幼稚園部・小学部では、二年前から長期的ループブックを策定し、教育目

標に基づくカリキュラム・アセスメントをおこなってきた。今、それを中学校以上に繋げていこうとしているところである。良い感じで取り組みが進んでいる。

桐蔭学園の教員はプロ意識が高く、一人ひとりが気骨があつてとにかくおもしろい。この先生たちと同じ職場で仕事をしたいと思ってきたことも、今回の異動に影響を及ぼしている。

私は桐蔭学園をハブとして、引き続き全国の学校教育の改革に関わっていきたい。そして、これを機に、「学校教育」と「人の発達」を統合する理論的な作業に着手したい。それに、地域連携・地域創成と人生100年時代を見据えたキャリア形成の問題を加えて、理論的・実践的な取り組みを進展させたい。

地域と人生100年時代の問題は、学術的にいえば、人の生における時間と空間の問題としてたいへん興味深いものである。

キャリア教育を地域連携としておこなう取り組みは、全国を見渡して無数にある。しかし、それが、子ども・若者の発達にどのような意味を持つのかの検討はほとんどなされていない。

発達論的には、養育者とのつながり（アタッチメント）をこころの基盤として確立し、それを拠点として心理的・社会的に空間を拡げていくのが、人生の基本である。しかし、幼児期から青年期にかけての、人生のもっとも基礎をつくる発達期に居住する身近な地域が、生活経験や規範の観点で

さほどのリアリティを提供しなくなっている。そのような現代社会において、それでも地域で育つ意味は何なのかを考えていくことは、理論的にとて難しく、しかし興味深い課題である。この問題を考え抜いてキャリア教育や地域振興の活動を位置づけていくことこそが、今地域創成に、ひいては日本社会のこれからに求められる本質的な作業であると信じている。

人生100年時代を発達論的に問題化するのも、学術の世界ではこれからの作業である。

今の発達論に従えば、70〜80歳あたりの老年期は、これまで生きてきた人生を振り返ってまとめ、生命を終えていく終焉期として説明される。しかし、今日の70〜80歳の人びとの多くは相当元気であって、生命を終えていく終焉期といった様相ではない。だからといって、現役の時のような仕事や社会活動に従事できるわけでもない。拡張する老年期をどのように捉えるかが大きな課題である。この問題は拡張する老年期の捉え直しだけでは済まない、人の発達全体に関わるものでもある。

つまり、100歳まで平均寿命が延びる時代を真正面から前提にすると、定年後は「趣味にふけてのんびり余生を過ごしたい」などと思っている大学生が四割もいる現状[※]に、これまた相当の「ヤバさ」を感じるのである。

実際、定年を迎えてから定年後に何をするかを考えるのでは、対応が遅いという考えをよく聞くようになった。「のんびり」するだけの老後を過ごしている人の多くは、それまで老後のことを考えてこなかったという見方である。この見方は、定年を迎える前から、「第二のキャリア」とでも

呼ぶべき定年後の人生を考えておくべきだという主張にも繋がる。

第3章で紹介したように、25〜29歳のビジネスパーソンのうち、高校・大学時代に将来のことを考えてこなかった人が四三・四%もいる。彼らはこれからどうなるのか。

このあたりをもっとマクロ的に、理論的に語るためのデータが必要である。課題は山積している。講話シリーズの第4巻目あたりから、このような問題を加えて論を発展させていきたいと、準備を進めている。

※溝上慎一(2018)大学生白書2018―いまの大学教育では学生を変えられない― 東信堂 を参照のこと。

なお、定年を迎えても、結婚や子育てで仕事が一時的に中断しても、一生働き続けたいとする大学生は、二〇一六年の調査で三八・八%いる。残りの内訳は、ここで紹介した「定年を迎えるまでは仕事をやめないが、定年後は趣味や娯楽にふけてのんびり余生を過ごしたい」(三九・一%)、「結婚するまでは働くが、基本的に、結婚したら仕事をやめて家事・子育てに専念したい(七・七%)」、「あまり考えていない」(一三・二%)、「その他」(一・四%)である。

学園のある横浜市青葉区は、二〇一八年四月の発表[※]で、男性は市区町村別で平均寿命日本一位の八三・三歳、女性も6位の八八・五歳と、ベストテン入りしている長寿地域である。このような長寿地域で、学校が単に子どもを幼稚園・小学校から高等学校、大学へと進学させる教育を提供する

のみならず、どのように地域社会の維持・発展にも関わられるかに挑戦して取り組みたいと考えている。理事長には、二〇一八年四月、トランジションセンターを設立してもらった。このセンターは、もう少し大きな役割を担うセンターであるが、まずは地域創成、人生100年時代の観点から活動を作っていく予定である。

本格的な研究・実践に向けての準備が着々と進んでいる。

※厚生労働省平成27年市区町村別生命表の概況 統計表1：市区町村別平均寿命

<https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/life/ckts15/index.html>

職場は変わるが、これまでの学校現場との関わりを最大限維持しつつ発展させ、新しい課題を加えて、私はもう一仕事したいと思っている。事情をご理解いただき、多くの関係者との変わらぬ交流を切にお願いしたい。

本書に関する御礼である。

一人一人名前を挙げられないが、アクティブラーニング型授業の実践や組織的導入に奮闘し、私と交流する全国の先生方、教育関係者にお礼を申し上げたい。彼らの授業を見学し、学校を訪問し、

意見交換をしてきたことが、本書の源である。彼らの本気で取り組む実践、彼らとの本音での議論が私に勇気を与え、私の仕事を支えている。心より感謝している。

本書で紹介した授業の実践者や取り組みの責任者には、説明の文章をチェックしてもらい、写真を提供してもらった。関谷吉史(桐蔭学園高等学校教諭、学年主任、高校男子部教学部次長)、館野泰一(立教大学経営学部助教)の各氏をはじめ、巻末の「本書で登場する教員紹介」に登場する先生方に厚くお礼を申し上げたい。

第3章「トランジションの観点からみて「仕事」で実際に起こっていること」で用いたデータは、二〇一二年に中原淳さん(立教大学経営学部教授)・公益財団法人電通育英会と調査したものである。データの再利用を許可いただき、お礼を申し上げる。盟友・中原さんには、いつもトランジションの先の仕事の世界がどのように動き、変わっているかを教えてもらっている。彼との交流・コラボレーション無しには、私のトランジション研究・実践は成り立たない。

東信堂の下田勝司社長とスタッフの皆さんに、心よりお礼を申し上げます。東信堂には、厳しい出版事情の中、私の仕事をよく理解し、短い期間で多くの書籍を出版してもらっている。ただただ感謝である。『アクティブラーニングと教授学習パラダイムの転換』(2016)、『アクティブラーニング・シリーズ全7巻』(2016～2017)、『大学生白書2018—いまの大学教育では学生を変えられない—』(2018)に引き続き、「学びと成長の講話シリーズ」でもお世話になっている。第1巻は『アクティブ

ラーニング型授業の基本形と生徒の身体性』(二〇一八年二月)と題しての出版であった。本書は第2巻目である。

出張や経理処理、データや資料整理、ウェブページの更新など、私の世に出る仕事を下支えしてくれている秘書の木村麻子さんをはじめ、林路子さん、瀬占桃子さん、三保亮子さんの溝上研究室のスタッフにもお礼を申し上げる。

妻への感謝である。妻には私の考えや着想を聞いてもらい、コメントをもらっている。あらゆる草稿に目を通して、不適切な表現や私の言い過ぎた乱暴な説明を見つけて直してもらっている。彼女の二五年の高校教員の経験も、私の高等学校の授業を見るまなざしを鍛える助けとなっている。

本や講演等で名前が出るのは私一人だが、その裏では実に多くの方々が私の仕事を支えてくれている。感謝の一言に尽きる。

最後に、私の事情を理解し、あたたかく送り出してくださいる京都大学高等教育研究開発推進センターの先生方、学内の関係者にお礼を申し上げて筆を置きたい。

この数年、飯吉透センター長(教育担当理事補)のリーダーシップのもと、センターはようやく全学的な仕事ができるようになってきた。問題は山積しているが、それでもカーネギー財団やMITでの二〇年にわたるアメリカでの経験をもとに、センターをマネジメントされてきたその手腕は、

さすがとしかいいようのないものである。私は一直線に正論を吐いてばかり進めるタイプである。彼はいろいろな関係者の利害に真摯に耳を傾けながら事を進めるタイプである。彼はいつも「それは」のようなもので」と、問題を時事にたとえて関係者を笑わせる。天才級的能力である。こうして私の仕事は頓挫し、彼の仕事はゴールする。そんなことが何度かあった。最後に良い指導をいただいたと感謝している。

松下佳代教授は、私の「若造」時代、教育学研究科の他講座で助手をしており、それ以来の同僚であるともいえる。センター試験の監督も一緒にしたことがある。その後群馬大学に異動されたが、二〇〇二年に京都大学のこのセンターに助教(後すぐ教授)として戻ってこられて、今に至る。数え切れないほどの多くの問題を二〇年近く一緒に考えてきて、議論をしてきて、指導もいただいた最高の同僚である。彼女との議論が、何よりも学びになると思ってきた。周りからは「サザエ(松下)とカツオ(溝上)だな」と言われ、よく笑われた。

この数年の学習指導要領改訂の作業では、初等中等教育に不案内な私にずいぶんこの世界の用語や事情を教えてもらった。彼女を講演で呼んで話を聴くのもなかなか難しい中で、二つ横の研究室のドアを突然トントンとたたいて、「ループリックって何ですか」などと質問して、すぐに教えてもらえた環境は、まさに贅沢きわまりないものであった。短い期間で、これだけ初等中等教育の世界に入り込んでいったのは、彼女がいたからだといっても過言ではない。

彼女がいなければ、私はもうとっくに京都大学を出ていたはずである。数年前そういうことがあった。他大学で内定もほぼ得て異動をしようとする中、彼女は「出て行くな」と言ってくれて、この話を白紙に戻した。その大学には迷惑をかけた。その彼女も、今回はあたたかく送り出してくれる。田口真奈准教授は、私の大学院の時の同級生である。彼女は博士課程を終えた後、このセンターに研修員で来て、数年千葉のメディア教育開発センターで助手、准教授として過ごして、再び京都大学に准教授として戻ってきた。「溝上君」と呼んでくれる。話もため口。いやそれでいい。学生時代から数えて二五年になる友だちである。

酒井博之准教授も田口さんと同様に、学生時代はお互い知らなかったが、同学年の同級生である。研究員、助教、准教授と長くセンターに勤めている同僚である。

教育アセスメント室の仕事を一緒にしている山田剛史准教授。山田さんは、非公式には私の一番弟子にあたる。彼が大学院修士課程の時に知り合って、その後インフォーマルにずっと心理学の指導をしてきた。私が講師の時、彼は博士課程を終えたので、教務補佐員としてセンターに呼んだ。その後、島根大学、愛媛大学で講師、准教授を務め、京都大学に准教授として戻ってきた。

彼との笑い話がある。彼が教務補佐員するとき、「今日は徹夜でこの報告書の原稿を仕上げような」と言って、ホテルに一緒に泊まり込んだことがある。夜食を買いにコンビニへ行った。彼が「徹夜するなら眠眠打破を飲んで気合いを入れましょう」と言うので、それを買って一緒に飲んだ。そう

いうものを飲み慣れていなかった私は、飲んだ直後気分が悪くなり、部屋に戻ってそのままバタンと倒れて寝てしまった。彼は自分の部屋で翌朝まで頑張った。朝私の部屋に来た彼は、「あれー、寝てる」と言っただけで呆れていた。彼と酒を飲むと、いつも思い出す忘れない二人の思い出である。もうあれから二〇年。山田さんも全国区の一人前の研究者になった。もう少しそばで指導をしてあげたかったが、その必要はもうないだろう。彼の活躍を心から祈っている。

他にも、一人ひとり名前を挙げられないが、ほか13名のセンターの准教授、助教、研究員。そして、大学院生。センターの事務職員。センターにかついていた先生方、センター長。全学で仕事を一緒にしてきた、知り合ってきた他部局の先生方、事務職員。これらのすべての方にお礼を申し上げます。有り難う。

私は京都大学を、そしてセンターを去ることになるが、出た後も学外研究協力者として微力ながら助力していく予定である。職場は変わっても、引き続き交流していきたい。

二〇一八年八月 京都大学での最後の夏

溝上 慎一